

実践報告

施設・機関見学レポート 2017

～ 佐藤ゼミ年間活動記 ② ～

佐藤みゆき*

名寄市立大学保健福祉学部社会福祉学科

名寄市立大学保健福祉学部社会福祉学科 佐藤みゆきゼミナールでは、毎年度ゼミナールに所属する学生の関心に応じて、卒業研究、進路選択に資すると思われる施設・機関を選定して視察見学を行っているが、ここにその成果を示し、記録を残すこととしたい。なお、お世話になった施設・機関の方々へは、ゼミ学生が各自で書いた御礼状をまとめて送付している。下記の学生の感想はその抜粋である。

1. 札幌市児童相談所 (札幌市) 2017年5月17日 3年次生・4年次生参加

札幌市児童相談所は、札幌市こども未来局児童福祉総合センター内にあり、本学からの入職者も多い。昨年に引き続き3回目の訪問であるが、資料に基づき児童相談所の業務の現状、特に児童虐待について説明していただいた。

○ 虐待など、実際に児童相談所で取り扱った事例をもとに説明して下さった際には、虐待の残酷さを知り、虐待を受けた子どもの傷だけではなく、性格や言動にまでも影響を与えることがわかりました。親や保護者の言動が子どもによく伝わるのかなど、子どもの人格形成において非常に大きな部分を占めていることに改めて気づくことができました。(3年次生)

○ 一時保護所では、内側のカギはいつも開いている状態にしているため、保護期間中も子どもたちは外に出て遊ぶことができたり、また、セキュリティカードがないと中には入れないようになっているので、施設にいる人以外は入れなかったりするなど、保護されている子どもたちの安全を確保しつつ、同時に自由も守るということを大切にしているのだと感じました。(3年次生)

2. 母子生活支援施設「すずらん」 (札幌市) 2016年5月17日 3年次生・4年次生参加

母子生活支援施設とは、児童福祉法に基づき、配偶者のいない女性、またはこれに準ずる事情(DV被害等)のある女性で18歳未満の児童を抱えて支援を必要とする人に居室を提供し、就労支援等の自立支援を行う施設である。札幌市中央区の公共交通の利便性の高い立地にあり、定員は20世帯である。

本ゼミとしては4年ぶり、3回目の訪問となる。主任母子支援員の方に丁寧なご説明を受けた。

○「経済的不安定さが、心の不安定さにつながってしまう」ので、まずは、母親の安定した収入源を確保するためのサポートをすることが大切であり、そのために母親が資格を取得するための支援を行っていることが印象に残りました。また、施設の見学を通して、「あたたかさ」を感じました。利用者をいつも明るく迎えらるるよう整えられた居室や、見学時にお会いした利用者さんの姿、そして、外から聞こえてくる子どもたちの遊んでいる声から、それらは伝わってきました。(3年次生)

*責任著者 E-mail:miyuki.s@nayoro.ac.jp

○ 退所者との交流会が開かれていると知り、利用者が希望を持って暮らすきっかけとなっていると感じました。このような場所が設けられていることにより、親同士の情報交換ができたり、近況を把握することができ、多くの人の居場所となっているのだと思いました。さらに、退所者が講師となって利用者に話をすることは、退所者側にも大きな自信になると感じます。(3年次生)

○ 施設内を見学させていただいた際に、その月ごとの全体目標や個人目標を掲示してあるのが目に留まり、その設定と反省はすべて子どもたちで行っているとお聞きし、良い取り組みだと感じました。自分たちで行ううちに自主性が育まれ、普段の学校生活でも率先して行動ができるようになることは、お母さんにとっても喜ばしいのではないかと思います。(3年次生)

3. 北海少年院 / 紫名女子学院 (千歳市) 2016年6月26日 3年次生参加

当ゼミでは毎年、千歳市郊外にある北海少年院(男子対象)と隣接している紫名女子学院(女子対象)を見学させていただいており、今回で6回目の訪問となる。少年法の改正、少年院法の制定等、非行少年処遇のあり方の変化に伴って、毎年の見学でも毎回新たな発見がある。

○ 少年と保護者との関わりを作るため、「保護者参加型プログラム」を実施しているとうかがいました。面会などで保護者と関わりを持つことは、退所後の社会復帰を円滑に進めるために必要なことであり、施設側から保護者に対して働きかけていくことが重要だとわかりました。一方で、保護者が全く面会に来ないケースや、過去に虐待を受けていたケースもあるということで、面会の回数が多いからといって、必ずしも成長の助けになるとはいえないと学び、家庭環境が少年の成長に多大な影響を与えるということを実感しました。(3年次生)

○ 印象深かったのは、昔と今で少年院に入ってくる子の質が違うというお話です。いわゆる“ワル”と呼ばれるような子よりも、今は立場のよくわからないパツとしない子が多いというお話でした。どこにも属せずに自分の居場所を見つけれない子たちが様々な支援の機会をすり抜けてしまった結果、少年院に来るとい話を聞き、どこか現代の子どもたちを取り巻く環境の問題につながっているようで胸が痛むと同時に、そのような子たちを最終的に受け止める場所としての少年院の意義について感じる事ができました。(3年次生)

4. 東神楽町役場 (東神楽町) 2017年7月5日 3年次生参加

今年度は、昨今、自治体の課題となっている居住人口の定着、人口増について、積極的な取り組みによって成果を上げている先進地の視察研修を行った。



写真1 東神楽町役場にて町長さんと

1つ目は、旭川市近郊の東神楽町である。東神楽町は、旭川市に隣接する面積68.50平方キロメートル、人口約10,300人の町で、米や野菜を中心とした農業が盛んである。平成元年から始まった大規模宅地開発により、平成2年に約5,700人だった人口が平成12年5月に8,000人、平成25年10月には10,000人と年々増加し、平成27年国勢調査速報値では人口増加率10.1%と全道1位の増加率となった。

また、町内には旭川空港があり、「花のまち」としても全国的に知られている(町ホームページから)。このたびは、山本 進 町

長が直々にご対応下さり、丁寧にご説明くださった。

○ 子育て支援だけではなく、様々な分野から総合的に政策を整えることが人口増加につながると言われていたことが印象的でした。子育て支援に限らず、宅地開発による雇用創出や、食育などにも力を入れているとうかがい、町民のより良い暮らしのために行ったことが結果的に人口増加につながったのだと感じました。(3年次生)

○ 地区別計画を作成する際に、住民とともに議論しあい、それぞれの地区の特徴に合わせた計画づくりを行っているというお話がありました。住民から直接、課題や困りごとを聞いて、それを計画に反映することで、住民の満足度が上がり、自分の町に対しての愛着が湧くのだと思いますし、東神楽町に住み続けたいと思う人が多いのだと感じました。(3年次生)

○ 学童保育については、町立体育館と併設してあるものや、学童保育の他に高齢者サロンと子育て支援を一か所で行っているものもあり、その発想に驚きました。一体化することにより、町民同士の交流も増え地域も活性化すること、まちの発展につながっているのだと感じました。(3年次生)

5. 東川町役場 (東川町)

2017年7月26日

3年次生参加

もう一つの人口増で有名な旭川市近郊の町は、東川町である。旭岳が町域にあり、その登山口にあたる旭岳温泉街と天人峡温泉が有名である。人口は約8,300人、北海道内で唯一上水道が存在しない町であり、「大自然と共生する町」として近年評価が急上昇し、道内外からの移住者、観光客が増加しているという。旭川家具の木工製品を製造する工房が点在する「クラフトの町」、写真甲子園が毎年開催される「写真の町」としても名を馳せている。

○ 東川町での定住移住促進が成功されている背景には、写真の町宣言をしてから今までの様々な積み重ねがあったということが印象に残りました。開放感にあふれ、アート作品に囲まれた魅力的な小学校など、「子どもを育てるなら東川だね」と思ってもらえる環境づくりをはじめ、住んでみたいと思うまちづくりがしっかりと行われているからこそ、株主制度や写真甲子園などで東川町を知った人の移住につながっていることを学びました。(3年次生)

○ 職員の窓口対応の質の向上に力を入れているとのお話がありました。窓口に来た住民に丁寧に接することで、町民からの厚い信頼が得られており、あえて、懇談会などを行わなくても普段の住民との関わりの中で町のニーズを把握していることがわかりました。(3年次生)



写真2 東川町 役場前で

○ 東川町では子育て政策として幼保一元化を行っていることや、保育料無償化など子育て世帯への支援があること、小・中学校での取り組みなど独自の展開をしていることがわかりました。「子どもを育てるなら東川町」と思ってもらえるよう、実際の住民ニーズに応えることで、小学校入学時の子どもの数が出生数よりも約1.5倍増加していることがわかりました。(3年次生)

6. 共生型施設ふれあいサロン「なごみ」 (芽室町) 2017年10月27日 3年次生・4年次生参加



写真3 ふれあいサロン「なごみ」

今年度の3年生、4年生合同の旅行を兼ねての視察見学先は、芽室町である。芽室町は帯広市の西隣に位置し、人口約19,000人の町である。基幹産業は農業で、商工業も農業に関連した加工業の企業が多くなっている。

最初に訪問した芽室町社会福祉協議会には本ゼミ出身の第8期生が就職しており、社協が運営主体となっている共生型施設ふれあいサロン「なごみ」の案内を受けた。「共生型施設」とは、子どもから高齢者まで自由に利用できる地域住民に開かれた空間である。

○ ふれあいサロン「なごみ」では、ふれあいの居場所づくりを目的に、「ごちゃまぜ」をコンセプトに運営されているということがわかりました。活用方法や活動内容を決めず、地域の方々が自由にやりたいことをできる場にすることで、誰でも利用しやすい雰囲気が作られているのだと感じました。・人気のある「教えて先生！」事業では、小学生が先生となって大人にクッキーの作り方を教えることもあるというお話が印象的でした。(3年次生)

○ 『「ごちゃまぜ」で行うことによってメンバーの固定化の予防になる』というお話が印象的でした。事業やイベントの開催にあたり、その目的に沿った対象設定を行うことが多いですが、初めから対象を「ごちゃまぜ」にすることで、多くの人が参加しやすくなり、また個性を尊重している様子がうかがえます。(4年次生)

7. 芽室町議会 (芽室町) 2017年10月27日 3年次生・4年次生参加

今年度のゼミ視察では、新しい試みとして「議会訪問」を行った。地方議会改革の先鋒として全国的にも有名な芽室町議会の事務局を訪問し、改革の経緯等について説明を受けた。芽室町議会の特色は、① 広報誌、SNSなどを駆使した情報公開、② 「二元代表制」を掲げて住民参加促進のための「議会サポーター」「議会モニター」「諮問会議」の設置、③ 議会機能の強化のために議会基本条例の制定にある。

視察当日は、副議長と議員4名の方々も同席され、議員席に座らせていただいた学生たちとディスカッションを行った。

○ 芽室町議会の「わかりやすい議会、開かれた議会、行動する議会」ということばが印象に残っています。なかでも開かれた議会、という点で、住民の関心を引き出し、住民とともにまちづくりをしていくために、まず活動を知ってもらうことが必要です。芽室町議会では、こまめに広報を発行したり、SNSで情報をいち早く発信したりしています。お話をうかがった直後に、Facebookで芽室町議会をフォローさせていただいたのですが、さっそく私たちの視察の様子が投稿されており、感動しました。(4年次生)



写真4 芽室町議会議場にて議員の皆さんと

○ 議会の取り組みとして、議会フォーラムが開催されていることが大変印象的でした。芽室町では、老

人クラブ、PTA、高校等と意見交換をすることで、高齢者、子育てをする親、次世代を担っていく人材が抱えている思いを引き出しておりました。それを議会フォーラムやモニター会議の開催により、政策につなげることで実際の行動に移しているところに感銘を受けました。(4年次生)



写真5 芽室町議会議場 議員席から

○ 議会改革の特徴として挙げられていた、「大きな改革よりも細部の改革・改善の積み重ねにこだわる」ということばが印象的でした。様々な自治体から注目を集める理由が、少しですが理解できたような気がします。(3年次生)

8. NPO 法人 プロジェクトめむろ(九神ファーム) (芽室町) 2017年10月27日 3年次生・4年次生参加

芽室町行程の最後に訪問したのは、NPO 法人 プロジェクトめむろが運営する「九神ファーム」である。近時、北海道内でも「農福連携」の試みが聞かれるようになってきている。「プロジェクトめむろ」は障害

者が働いて生きていける町を目指す事業で、活動の中心を担うのが、2013年に開所した就労継続支援A型事業所「九神ファームめむろ」である。知的障害や精神に障害のある約20人が働き、じゃがいもなど農産物の加工を行う。雇用契約を結び、平均月給11万5千円と道内でも有数の高賃金を実現しているという。



写真6 九神ファームめむろにて

○ お話をうかがうまでは、「農福連携」とは、障害者の日中活動のために仕事を与える、福祉的なものだと考えていました。と同時に、福祉的な就労であるため、健常者に比べて工賃が低いのは仕方ないものと思っていたところがありました。しかし、ビジネスの中で障害者を一人の労働者としてみるからこそ、労働している障害者に最低賃金を払うことができるという言葉聞き、今まで考えていた農福連携のイメージが変わりました。(4年次生)

○ 障害者雇用をビジネスとして運営しているというお話も興味深かったです。九神ファームでは、給与として10万円を払っていますが、これほど多い賃金の例は初めてでした。ビジネスとして、障害者本人、福祉機関、企業、消費者の誰もが我慢をすることのない取り組みを行っていくことで、皆がwin-winとなる関係が築かれ、障害を持つ方にも多くの賃金を支払うことができるのでしょう。(4年次生)

○ (障害者の)可能性を奪わない」というお話が、とても印象に残りました。できないことがあっても「障害者だから」といって、初めからチャンスを奪ってしまえばそこに成長はありません。「まずはやってみる」ことからできることを増やしていく、その人の自信につなげていくことの大切さを学びました。(4年次生)



写真7 ばあばのお昼ごはん 前で

○ 法人の経営で、障害者の方々が調理、接客を行っているレストラン「ばあばのお昼ごはん」で豊富なメニューの中からおいしい定食をいただきました。お昼時の店内はお客さんが一杯で、やはり、販売する商品のクオリティが高ければ需要も多く、働く上でのやりがいにつながるのではないかと感じました。(3年次生)

9. 北海道学生研究会(SCAN)第8回報告会(札幌市) 2017年11月25日 3年次生・4年次生参加

これも今年度から初めての試みで、札幌大学で開催された「北海道学生研究会(SCAN)」の第8回報告会に参加し、4年次生が共同の卒業研究「名寄市における学習支援の推進～名寄市立大学を活用した取組みの提案～」を基にした発表を行った。施設・機関の見学ではないが、活動の記録としたい。



写真8 SCAN 報告会会場(札幌大学)にて

「北海道学生研究会 SCAN」とは2010年、釧路公立大学のゼミを運営幹事として発足した北海道内の学生の研究・交流をはかる団体である。学生・企業・地域を結び付けた地域活性化に貢献することを目的とする。

主な活動は 年1回、11月に開催される合同研究発表会で、学生の視点から地域課題にかかる研究発表を行い、質疑応答と研究者や金融機関等の実務家から講評を受ける。今年度は、本学の他、札幌大学 北見工業大学、北海学園大学 釧路公立大学 等の参加があったが、経済・経営学専攻のゼミがほとんどであり、福祉系大学からの参加は、今年は当ゼミだけであった。

○ SCANに参加し、経済を学ぶ人たちとの視点の違いを知ることができました。また、政策提言をするときにはその根拠と数字、実現可能性が重視されることがよくわかり、貴重な経験でした。(4年次生)

○ 3年生は4年生の発表を発表者の後ろから見でしたが、とても立派な発表だと思いました。難しい質問にも立ち止まることなく丁寧に答えていた姿に感心しました。他大学の発表を見て良い勉強になり、来年に向けての気持ちが高まりました。(3年次生)

日頃の教育において、福祉職が他の専門職と伍して真の連携、協働をはかるためには、「自らの専門性と実践を適切なことばで的確に他者に伝える」能力が不可欠であることを痛感している。今後も「他流試合」は続けていきたいと考えている。

今年度も、学生とともに現場に出向くことで、教員も新たな気づき、学びを多く得ることができた。

最後になりますが、私たちの視察見学に快く応じてくださり、ご丁寧なご対応をいただきました関係機関、施設の皆様方に心より感謝申し上げます。

2017年度 佐藤みゆきゼミナール

4年次生	上林 咲野	中嶋 亮太	山川 幸也
3年次生	黒田 彩加	外崎 ひかる	藤井 七海 藤森 柊